

「土壌動物学への招待 採集からデータ解析まで」

Practical guide to soil zoology : From sampling to data analysis

日本土壌動物学会編，東海大学出版会，261pp，定価3,360円（本体3,200円＋税）（2007）

土壌動物学会創設30周年記念として，企画・出版された土壌動物調査・研究のハンドブックである。サブタイトルが「採集からデータ解析まで」とあるように，（１）土壌動物学へようこそ，（２）採集と同定，（３）野外実験と分析，（４）多様性の解析，（５）土壌動物研究の実際，（６）環境と土壌動物，（７）土壌動物学を学ぶ人へ，の7部，31章で構成されている。土壌動物の顔ぶれの紹介，採集法・分類に始まり，野外調査の実際，得られたデータでの各分類群の生活史，個体群動態，群集解析，多様性の解析，さらには地理的変異や環境指標への研究が紹介されている。マイクロゾム，安定同位体，化学生態，毒性学といった土壌

動物学分野ではじめて紹介される興味ある課題もある。内容が多岐にわたるだけに各章はやや短い，巻末にたくさんの参考文献がつけられている。

多くの章を若い研究者が執筆されているだけに，最近の研究の成果・最先端の研究課題が読み取れ，わが国の土壌動物学の活動の全貌がみえてくる。身近なところにありながらも，わかっていないことの多い土の中の動物調査・研究が，本書で大きく進むのではと期待される。中学・高校の自然観察・クラブ活動，地域の動物相調査，環境アセスメントなどにも役立つであろう。

（渡辺弘之・京都大学名誉教授）

「深泥池の自然と暮らし 生態系管理をめざして」

Nature of Mizoro-ga-ike and related human life : Toward its ecosystem management

深泥池七人委員会編集部会編著, サンライズ出版, 247pp, 定価3,150円 (本体3,000円+税) (2008)

本書は連綿と続く、深泥池研究の現時点での総合的な成果物であると同時に、その保全をめぐる活動史の記録集でもある。保全生態学・保全生物学が今日のように興隆を見せる以前から、研究と保全活動が両輪として進んだ深泥池は貴重な事例である。長年深泥池に関わった多くの研究者自身、保全活動関係者自身が執筆をし、水道水流入問題や外来魚駆除の経緯などに、その思い入れが読み取れる。初期の「深泥池団体研究グループ」を率いた那須孝悌氏は鬼籍に入ったが、その後の研究をリードし続けた諸氏による今後の深泥池保全につながる一里塚、というのが本書の第一印象だ。

前文にもあるように、これまでも深泥池を解説する一般書は2冊が刊行されているが、今回の本は以下の各点でユニークと感じた。

- ・深泥池を都市近郊に奇跡的に保全された氷期からの遺物というだけでなく、住民が歴史的に利用してきた文化的景観として理解しようとしていること：深泥池で行われてきた生業について、過去そして現在の姿を具体的に示している。また、遺跡・教育利用や住民の活動も含め深泥池という場と人のつながりをしっかりと提示している。

- ・集水域での保全の必要性が具体的なデータとともに示されていること：周辺の里山から供給される水量や水質について、これほど詳細な検討がなされ、またその長期にわたる観測がなされている場所は少ないだろう。同時に動植物を含めて周辺生態系とのつながりも詳細に記されている。

- ・保全活動史として、その状況を克明に記録し、現時点だけでなく将来までを見通したものであること：研究の進展と並行して保全対策が検討・実行された経過と、その効果が示されている。新た

な外来種侵入など、課題の発生についても、その初期過程が示されている。さらには、道路問題など現状の分析が、将来の課題・懸念も含めて提示されている。過去形でなく、今後も続く深泥池の保全活動を見すえた書となっている。

このように、深泥池の貴重性・保全上の価値を示すとともに生態系解明と保全に向けた取り組みをつぶさに眺めることができる。今後、深泥池のみならず他の湿地保全や都市近郊の自然保護に関わる場合に有用な先行事例となるだろう。

最後に次の一里塚に向けた期待を込めて2点。どちらかというと、本書は初めて「深泥池」という名を目にする人向けではないのかも知れない。ムック書籍という形態とたくさんの写真は、ページを繰る者の興味を強く引いてくれるが、そこで語られる内容はややもすると論文調・報告書調だ。現象の学術的な意義と、今そこで起きていることの重大性、あるいはおもしろさを語る口調は少し違う。著者間の意識にややぶれがあったかも知れない。もう一つは昭和10年頃まで残存していた、現在の宝ヶ池運動公園球技場周辺の湿地についての言及がほとんど無い点だ。この湿地の植物については千葉(1977)に詳しいが、ミツガシワなどを含んでいた。周辺に点在していた湿地群の残された一つととらえる事も、過去の記録が十分でない以上難しくはあるが、忘れないでおきたい。

引用文献

千葉尚二. 1977. 京都市の失われた湿性植物群落. 関西自然科学, 29: 3-7.

(佐久間大輔・大阪市立自然史博物館)